城東・鶴見 保健生協

無産者医療運動の系譜

当時３診療所を支えた人たち。前列中央が木下理事長。

城東診療所

若き日の木下先生、奈良から赴任

一九五三年、岩井先生の還暦祝賀会にはその徳を慕い全国から約四百名が集いました。その場で岩井先生の業績を記念した病院の設立が提案され、満場一致で決議されました。社会福祉協議会会長や医師会会長の面々が賛助者となり、「ゆかりの地城東区」に還暦記念病院建設のため百万円の募金を集めて診療所が九月に開設されています。これが今の城東診療所です。

＊

大阪城の東北に位置し、寝屋川と運河に囲まれ、鋳物工場や古くからの長屋が立ち並ぶ一帯に建つことになった診療所の所長には、岩井先生の指名により当時奈良にいた若き日の木下栄作先生に白羽の矢が立てられました。木下先生は一九四九年から二年間、岩井先生が院長を務めていた東成の国際平和病院で診療に従事していたことがあります。国際平和病院では先進的で充実した医療活動を展開していましたが、韓国人の病院主とその甥の事務長がしきる個人の所有形態をとっていたため、管理上のごたごたが絶えませんでした。木下先生は当時病院で婦長をしていた奥さんと結婚し、奈良県の岡谷診療所での勤務を経て夫婦で赴任することになりました。

＊

診療所の開設初日は午前三人、夜一人の患者しか来ませんでした。そして、三人目の患者にこう言われました。

「若い先生やな、共産党やてな、わては共産党のことわからへんけど気に入ったら宣伝したる。しっかりやり」と。

創設当時の野江診療所

保健生協創立以前の蒲生厚生診療所

屋根裏住まいで夜間救急

しかし、赴任の条件にあるはずの住宅は用意されておらず、仕方なく診療所屋根裏に急ごしらえの部屋を作り、そこで親子三人が生活を始めました。そのうち評判を聞き伝えて患者も増え、一年も経たないうちに一日八十人にまでになりました。看護婦も六人に増やし、診療所での共同生活が始まりました。

＊

夜間の緊急往診には応じない開業医もまだ多く、診療所の玄関が叩かれることもしばしばでした。先生はまだ若かったこともあり一晩に何度叩き起こされても平気でした。患者はついに一日百名を超え、ある程度の剰余も出せるようになりました。年度末には八万円の剰余もあがり、患者さんからのカンパも足して三百ミリの中古レントゲンを購入し、まだ珍しかった胃の透視を毎日五、六人行いました。開設翌年の六月には一四〇名を記録することになり、ついに診療所も手狭となり、設備更新も必要になってきました。

重装備の大型診療所へ

診療所の評判も広まり患者数も急激に増加したため、開設三年目と六年目に増改築を行っています。待合室と検査室の拡充、かつて道路を半分も占拠していた自転車の置き場所確保などです。このころ患者さんや地域との結びつきもいっそう深くなり、さまざまな医療要求が寄せられるようになりました。第二次改造は産婦人科設置のためでした。カンパを訴え、高性能五百ミリレントゲンを購入しています。前年、地域で医療生協の前身でもある「健康友の会」を組織しており、事業目的の「無料で健康診断を行う」ことに大いに役に立ちました。

＊

「おもろい先生のおる」診療所は急速に地域で信頼をかちえて大型診療所として拡大していったのでした。

野江診療所

豊かな保健活動を展開

城東診療所ができて間もない一九五五年頃、関目地域の人々で野江、関目地域の民主診療所建設が話し合われました。戦前の無産者診療所の伝統を受けつぎ、大阪にはすでに三十二の民主病院、診療所があり、城東区では他に中浜診療所が働く人々の診療所の役割を果たしていました。

＊

一九五七年二月、岩井弼次、平岡正三（府会議員）、木下栄作、嶋田生一（榎並小ＰＴＡ会長）、李福作（朝鮮総連府本部）の呼びかけで建設委員会が結成され、常任として酒井平氏（後の専務理事）が配置されました。四七一名から寄付金九五万円、時計一台、顕微鏡一台が寄せられました。木下医師が設計し木造平屋建て三〇坪、総工費九三万円かけ、六月着工し、七月に開設されました。

城東・鶴見保健生協

岩井記念会城東診療所創立10周年記念祝賀会

初日五人、二日目三人

所長は佐々木典彦医師に依頼し、一年間の条件で来てもらいました。看護婦は城東診療所と岩井医院からの派遣でした。

「分に過ぎている」と言われたコンデンサ式レントゲンは七〇万円もしました。患者は初日五人、二日目は三人でした。欠配こそありませんでしたが安い賃金は慢性的に遅配でした。開設三ヵ月で外来四〇人になり、帳簿上は収支があってきましたが、あいかわらず借金返済に追われ、事務長は毎日自転車で金策に走り回っていました。

マッチ箱で便検査

当時は回虫など寄生虫症罹患率が高い時代であり、妊娠中絶を繰り返す人も多くいました。地域に打って出る保健活動という、医療生協らしい活動を展開していきます。「診療所だより」を無料配付するとともに、街頭にみかん箱を置き、マッチ箱の便を回収し検査結果を返し、保健所で借りた幻燈（スライド）を担いで受胎調節懇談会を開くため患者の家を回りました。現在の大腸がん検診やおしっこまつり、班会での健康チェックなど医療生協運動のルーツがここにありました。

保健生協の創立

「大阪の生協運動を本格的に動かした」

「住民参加にはどんな組織が有効なのか」

＊

木下先生は、設立二十年をへて様々な管理運営上の矛盾を抱えていた城東区にあった三つの民主診療所、城東、蒲生、野江のあり方を考え、結果として生協化を選択しました。一九七六年、「みんなの力で健康で明るい街づくり」を合言葉に城東・鶴見保健生協（理事長木下栄作、専務理事酒井平）が創立されました。組合員千百世帯、出資金七百万円あまりのスタートでした。まず結成準備事務局を立ち上げ、神戸、岡山、名古屋の先進的な生協を調査した上で運動方針や事業計画を策定し、生協らしさを追求しました。血圧計を班に貸し出し、測定講習会を開いています。今でこそ班（家庭）での健康チェックは珍しくありませんが、当時はきわめて先進的でした。

＊

創立当時、大阪の医療生協は全国レベルから二歩も三歩も遅れをとっている状況でした。後発の医療生協としてスタートした城東鶴見保健生協の運動レベルは当時の医療部会事務局長に、「大阪の生協運動を本格的に動かした」とさえ言われました。

まった生協診療所用地。市内一の医療過疎地
「鶴見区に診療所ができるよ」

故　木下栄作・城東診療所前所長

組合員パワーを結集し、まった、今津の建設、蒲生の全面増改築へ

一九八〇年、組合員の要求により「大阪市一の医療過疎地域」鶴見区に四番目のまった生協診療所が建設されます。歩けばきしむほど古いアパートを改装しての診療所でした。この頃、保健大学や社保学校、健康まつりが旺盛に開催されています。野江診療所、城東診療所が全面増改築され、一九八八年新五ヵ年計画により今津に「第五診療所」建設（今津生協診療所）が始まりました。組織も飛躍的に拡大し、組合員数は創立時の一〇倍以上、出資金は二〇倍以上にもなり、一九九一年にまった生協診療所、一九九五年には蒲生厚生診療所の全面増改築など多彩な組合員要求に応え、次々と施設を拡大、更新していきました。これらの運動が後の新病院建設に受け継がれていきます。

「協同の未来にロマン」を探求した医師～木下先生

病気しか診ない専門医でなく、生活を含めわかることを重視し、「しがない一般医」を自認していた木下理事長が日本生協連医療部会の運営委員長に就任すると、保健生協は他のどこよりも医療部会に結集するようになります。医療生協らしい保健予防活動とそのパワフルさは全国から注目され、手本とされました。

＊

何足ものわらじを履き続けた木下先生は、最後まで診療所長として地域医療にこだわり続けます。創立十五周年誌の座談会では、「高齢者問題」を保健生協が取り組むべき重点課題に挙げ、早くから地域での看取りの重要性を訴えています。ボランティアによる配食など医療生協の支部で高齢者を支える取り組みを重視し、班会や保健大学、また毎年敬老の日の支部主催「オールドパワーに感謝する会」にも参加し、まさに保健生協の顔であった木下先生は合併間もない二〇〇一年七月九日、七十九歳で永眠する最期まで診療所の一医師であり続けました。

＊

それは、先生が保健生協創立十五周年を機に六十九歳で書いた自伝「街・ひと・診療所」のあとがきで「これからの十年はどう展開していくのでしょうか。六十九歳の私はいったいいつまで長生きするのでしょう」としめくくったちょうど十年後のことでした。